

図書館報

ソフォス

σοφός

No. 43 March 2012

発行 沖縄キリスト教学院図書館  
〒903-0207  
沖縄県中頭郡西原町字翁長777番地  
TEL : (098) 946-1236 FAX : (098) 946-1237  
URL : <http://www.ocjc.ac.jp/library/lib.html>  
E-mail : [toshokan@ocjc.ac.jp](mailto:toshokan@ocjc.ac.jp)



## 本を捨てる

沖縄キリスト教学院大学人文学部  
英語コミュニケーション学科  
教授 大城 宜武

図書館は、本を収蔵する。何の不思議もない。本は物理的に形をもって存在する。形があり、重みがあり、一定のスペースを占める。図書館は本を収納するスペースを確保している。図書館のスペースには限りがある。本は増殖する。増え続ける本はやがて図書館のスペースを覆い尽くし、スペースの限界を突破してしまいかねない。

古代バビロニアの図書館(本は粘土板の形をとった)以来、常に本とスペースの闘ぎ合いは続いてきた。本の形質は粘土から動植物の皮、パピルスなど草木、と姿かたちを変え、紙に至る。そして簿冊となり、現今の図書の形で安定する。紙の発明と共にグーテンベルグの印刷機の発明が、表裏一体となり図書の増殖に拍車をかける。複製技術の発展は膨大な知材を本として流通させてきた。

複製技術の側面から見ると、印刷メディアすなわち本は長い間主役の座を維持し続けてきた。思想や文化は長い間、本の形で記録、蓄積されてきた。その金字塔が図書館である。しかし、今や強力なライバルが出現した。電子メディアである。電子メディアは発展途上ではある。ますます進化普及し、いずれ本を駆逐することになるのだろうか。

印刷本から電子本へとパラダイム転換が起こりつつある。電子メディアはインターネットと接続することにより、図書館の本に取って代わる。電子本は、形ある「物」としては存在しない。バーチャルである。図書館から本がなくなる。それどころか場所としての図書館は消滅する。あるいは端末機のみが置かれたスペースに様変わりすることになる。しかし、メディア発展史を見れば、ニューメディアが旧メディアを席卷するとしても、旧メディアはしぶとく残る。電話の発明によっても手紙は生き続けるし、テレビが普及しても映画は健在である。

本とは何か。本は、知識・情報の乗り物である。文字記号や図画的に本として刻印されて初めてその形を得る。知的情報は文字を介して、また図絵を介して本に成形される。情報は文字や図絵に乗り、文字や図絵は本に乗る。それら情報を満載した本は、知の収蔵体としての図書館に居場所を確保する。

本は「物」である。本の価値は、物としての価値と知識・情報の価値の二面性を持っている。両者は表裏一体の関係にある。物としての本に愛着を抱く人々がいる。愛書家(フィロ・ピプロン)である。本の内容はともかく、本そのものを愛するのである。彼らは本好きである。本が好きだからと言っ

て読むのが好きなのではない。

図書館には読書好きがたむろしていると想像してみよう。読むことそれ自体が好きなのであって、本そのものにはあまり興味がない。そのような者にとって本を捨てるなど何の痛痒も感じないだろう。そこで…

スペースの限界を超えると、図書は廃棄される運命にある。特に本ではあっても「雑誌」は保存に向かない。通常の単行書と違ってこれらは散逸しやすい。したがって製本されることを必要とする。雑誌類の保存は、購入費と製本費の二重の出費を求める。雑誌類は敬遠される。そこで廃棄の運命を突きつけられる。有名どころの学術雑誌はデータベース化されて電子版が流通している。すると、プロバイダーと契約して常時検索閲覧できるような方策がとられる。スペースも二重出費も回避できる、というわけだ。だが、めでたし、めでたし、とはいかない。

データベースの利用が可能なのは、その契約期間中のことである。期限が過ぎれば、どこかに電子的に保存されているすべての情報から切断され、手許に何も残らない。図書館の蔵書が一挙に消失したようなものである。スペースの中はがらんどうになってしまう。プロバイダーの匙加減ひとつで、いとも簡単に情報隠蔽がなされ、情報操作される危険性を持つ。利用料金設定の独占も懸念される。

有名ではない、多数の雑誌(定期または不定期刊行物)があり、これは電子化される可能性は低い。だから、散逸しないよう細心の保管姿勢が求められるのだ。雑誌類は、一回性と考えたほうがよい。一度失われると、単行書と違って入手が困難になる。もし新たに入手しようとしても今度は高額になりすぎて手が出せない。他の図書館に依頼しても、そこも同じような事情から所蔵していないかもしれない。

とりわけ郷土出版物は細心の注意が必要である。当たり前にも身近にあるので、粗末に扱い、保存する意識が失われる。一度失われると二度と見えないことはないと考えた方がよいだろう。

本をめぐる状況は、電子本、インターネットの出現で、グーテンベルグの印刷術の発明に匹敵する。教育現場からも図書館からも印刷本が消える。本屋も廃業に追い込まれる。人々は読む為に、電子閲覧機器を持って生活する。ホモ・エレクトロニクスの誕生である。しかし、電子化すなわちデジタル化した本の世界はデジタル・デバイドを生み、知識の格差をもたらす。これからの図書館の生きる道とは？



## ダリ画 「ウルガタ」聖書購入

沖縄キリスト教学院理事長  
神山 繁 實

ダリ画「ウルガタ聖書」(交付された聖書・教皇の権威によつての意)は、本学院ホームページに掲載されているように、文部科学省学術図書助成金を得て購入することができた。これは、ダリ画「ウルガタ聖書」であるが、後述するように、ダリのサイン入りの豪華版限定 199部の第 109番で全5巻である。定価2,940,000円で、そのうち文部科学省から40%の補助を得て購入した。購入先の雄松堂のカatalogから引用させてもらうが、ダリの「聖書」は予約者向けの限定版99セット、特別限定版が199セット、豪華版が1499セット作成された、ということである。その他に、6枚の版画セット(未製本、テキストなし)がいくつか作成されたということである。本学院が購入した「聖書」は、特別限定版の199セットのうちの109番目のものである。これには、ダリの手の形の模型もセットになっている。

1. ダリと「ウルガタ聖書」について:ダリという風変わりな画家の挿絵と「ウルガタ聖書」との組み合わせはユニークである。ダリは、1904年5月11日、スペインのカタルーニャ地方フィゲラスの裕福な公証人の家に生まれたが、母も裕福な家の出であった。彼は絵画の才能を認められ、1922年、マドリードのサンフェルナンド美術学校に学び、卒業後、1925年にはマドリードのダルマウ画廊で最初の個展を開いた。更に、当時パリの有名な画家たちの知遇を得、彼の才能を遺憾なく発揮することができた。彼はシュルレアリスト・グループに属したこともあったが、そのグループの中では微妙な立場にあったと聞いている。

彼の奇行はよく知られているようであるが、それらの行為は、彼の本心からではなかったようである。彼はシャイで、子どもっぽいところもあったようであるが、常識人であったとの評価もある。作品もユニークであると言われているが、政治的立場もファシストではないかと疑われもした。それらは、ダリ自身の作品をアピールする舞台装置の観は否めない。ともあれ、彼はスポンサーの影響で、敬虔なカトリック教徒となり、スポンサー且つ友人の熱心なカトリック教徒であったアルバレット(Giusepp Albaretto)に依頼されて、1963-64年にかけて、105枚の水彩画をウルガタ聖書に描いた。是非、ダリの絵も観ていただきたい。

2. ヒエロニムスと「ウルガタ聖書」について

ヒエロニムス(Eusebius Sophronius Hieronymus, 347年-420年9月30日)は、聖アウグスティヌスや聖アンブロシウスと並ぶ四大ラテン教父のひとりであった。彼はキリスト教徒の両親のもとに生まれ育ったが、ヒエロニムス自身は、キリスト教信仰には全く関心を示さず、ローマに留学して修辞学や哲学を学び、ラテン語の文章を記憶する能力は抜群で、前期ストア主義を代表するセネカやエピクロスの代表的な著作をすべて暗唱していた。ヒエロニムスは、ラテン教父の中では最も教養に優れた人物であったと言われている。ヒエロニムスは、優れたキリスト教の弁証家で、多くの神学

的著作を残してきたが、神学における最大の功績は、後世に残る『ウルガタ聖書』(ラテン語訳)を世に出したことである。彼の何事にも徹底して取り組む姿勢は、学問の方法論から私生活に至るまで一貫しており、自分自身に対して厳しく律していたことで有名である。

ヒエロニムスの転機となった出来事があった。その経緯は、ローマ教皇ダマスス1世に彼の学識を高く評価され、重用されることになったことから始まった。結論から言えば、ヒエロニムスの歴史的・学問的功績は、ウルガタ聖書のより完璧な翻訳と校正を重ね、中世から20世紀の第2バチカン公会議に至るまでカトリック教会のスタンダードであり続け、標準「ウルガタ聖書」として揺るぎない位置を占めてきたことである。

それまで多くのラテン語訳聖書が校訂されて流布していたが十分な権威を持つ聖書にはなりえなかった。ごく普通に、「セプトウアギンタ」(旧約聖書のギリシャ語訳)を底本に訳出されていたが、ヒエロニムスから見れば、不正確で信頼できるものではなかった。それまで無数にあったラテン語訳聖書はすべて「ウルガタ」と称せられていた。ヒエロニムスは、これまでの多くの「ウルガタ聖書」翻訳の不備を痛感して、自らアラム語やヘブライ語を使用している地域に長逗留をして、原語をマスターするのみならず、当時、ユダヤ人の間でごく普通に用いられていたアラム語圏内で修行と生活をしつつ、言語をマスターしていった。また、彼は中近東やパレスチナ(ベツレヘム、エルサレム)やアレクサンドリア等に逗留して聖書原典の原語そのものから訳出していった。ヒエロニムスが翻訳した「ウルガタ聖書」はこれまでの「諸ウルガタ聖書」とは異なり、極めて精度の高い言語に即した翻訳を完成させ、405年には一区切り付けることになった。

その他、彼は歿するまで多くの神学的著作と書簡を残し、後世への類まれな学問的成果を後の世まで、知的・精神的遺産として残した。また、他宗教や哲学に対して、キリスト教の立場を弁証した。ヒエロニムスの「ウルガタ」聖書は、中世から20世紀の第2バチカン公会議にいたるまで、カトリック教会のスタンダードであり続けた標準「ウルガタ聖書」としての揺るぎない位置を占めてきた。ヒエロニムスは、もともとラテン語で著作活動を行ってきた神学者であるが、聖書の原典の言語であるギリシャ語、アラム語、ヘブライ語に通じ、同時に豊かな古典知識を備え、その後の教会と神学の歴史に大きな影響を与え、偉大な足跡を残してきた。ヒエロニムスの聖書研究と聖書翻訳の営みは、後世にも大きな影響を及ぼし続けてきた。ヒエロニムスが訳出した「ウルガタ聖書」に対する神学的・言語学的検証は、尚不断に継続されている。特に、聖書翻訳に係る学問領域は、止まるところを知らない total science であることを改めて実感しているところである。





## 情報と「出会う」ために

人文学部  
英語コミュニケーション学科

准教授 浜川 仁

図書館といえば、いわずと知れた情報の集積地である。さまざまな情報が本や雑誌となって集まってくる。いろんな人たちが、情報を求めて、情報と「出会う」ためにここにやってくる。

近年、その図書館がインターネットを活用した情報提供サービスに力を注いでいる。電子ジャーナルやデータベースの導入に伴い、僕たちの情報との「出会い」のありかたも大きく変わりつつある。

フランスの現代思想家ジャック・デリダは、かつて思想家のことを、さまざまな考えや概念が手紙のように集積する「郵便局」のようなものだと語った。その「郵便局」から彼ら／彼女たちの「手紙」が民衆のもとへ送達されるというわけだ。図書館もまた、そういう場所であることは言うまでもない。書庫にとこと狭しと並べられた本や雑誌を通して、貴重な情報や知識が私たちのもとに届けられる。

ところで、意中の本をOPACで蔵書検索し、書棚を見まわしているうちに、「こっこのほうが面白そうじゃねえか」、「この本も借りちゃえ」というような経験は、誰にでもあるだろう。これを批評家の東浩紀にならって「誤配」と呼んでみよう。それらの情報を掘りあてるだろうことは、あなた自身まったく予期していなかったからだ。蔵書検索→探索→借出という因果の流れに突然挿入された、想定外の「出来事」だといえる。

さて、電子ジャーナルやデータベースによって、こうした情報との出会いがさらにスリリングな体験となったことにお気づきだろうか。検索エンジンにキーワードを入力すると、さまざまな書籍、雑誌、論文のタイトルが一瞬のうちに画面に立ち現れてくる。キーワードを打ち込むだけで、ありとあらゆる情報ソースが今や入手可能なのである。

大英博物館や国会図書館所蔵のある本が読みたいとする。もしこの本が電子化されていたら、その情報は世界中どこからでもアクセス可能である。もちろん、ネットに繋がっていてセキュリティがかかっていなければ、ということであるが、とにかくアクセスの方法さえ分かれば、世界中のどんな電子書籍を閲覧することも原理的には可能となった。実際に、Google社の創業理念の中には、世界中全ての書籍を閲覧可能にするという気の遠くなるような計画が盛り込まれているという。

従来の図書館の役目とは何だったろう。それは、精々あなたの出会いを助けるためのマッチメーカーとしてのそれではなかったろうか。自分の好きなタイプをあらかじめ告げておいて、素敵なお相手を探してもらおう。図書館のOPACというのは、そんな仲人たちと同じ役割を果たしている。あなたの好みにぴったりあつた本を探し当てるのを、お世話してくれていたのである。

だが、データベースの導入とともに、予想に反するような思いがけない本と出会う確率が格段に高くなった。私たちは、意外な情報に、想定外の状態で、さらに高頻度に遭遇することになるのである。

図書館の電子ジャーナルやデータベースに思いつくままキ

ーワードをインプットしてみる。するとありとあらゆる書籍たちや雑誌たちについての情報が瞬時に、そして文字通りピンからキリまでスクリーンに群がってくる。「なぜこんなものまで」と思うような「フリーク」たちまでも澄まし顔で陳列されている。そのほとんどがアダルト・サイトの紹介であったりするのだが、この情報のジャンクヤード全体が醸し出す、むせ返るような熱気をあなたは心の肌で感じとるだろう。

そうやって、たまたま探してあつた情報ソースがPDFファイルであった場合など、興奮は一気に高まる。作者や所蔵者のものと思いき落書きや備忘メモ、インクの染みにいたるまで、余白にくっきりと映っているのだ。

これは、ドラえもん「どこでもドア」が電子的に現実のものとなったということだ。いや、そもそもどこへ連れて行ってくれるのか分からないような「どここかもドア」と呼ぶべきかもしれない。キーワードを入力するだけで、そこに頼んでもいないサイトの情報が、澄まし顔でならんでいる。command(指令)を入力したはずのあなたは、自分がcommander(司令官)ではなかったことを思い知ることになる。

ここにあるのはまことに不思議な「能動性」である。古今東西のありとあらゆる情報がアクセス可能になるいっぽうで、私たち検索人はさまざまな「情報」の混沌(カオス)に放り出されてしまうのである。

大自然の中で目標を見失うと遭難してしまうが、目につくものが多すぎて、どれが本当の目標なのか分からなくなってもやはり遭難する。いや、孤島に取り残されるロビンソン・クルーソーよりも、むしろ竜宮城で油を売っていた浦島太郎のほうが、よほど遭難しているというべきではないだろうか。せっせと日記つけるクルーソーは、ある意味故郷を見失ってはいないが、浦島太郎のほうは時の経つのをさえ忘れているからだ。

おもしろそうなリンクを夢中になって辿っていくと、とうとう何を探していたのか分からなくなってしまったという経験は誰にでもある。こうした「認識論的遭難」と呼んでしかるべき体験は、健康な若者なら誰でも持っているはずの「遭難願望」を充分満たしてくれる。見知らぬサイトを時の経つのも忘れて次々とブラウズしているうちに、とうとうネットカフェから出られなくなってしまう。

スクリーンはとうてい消化できない圧倒的な量の情報で埋め尽くされている。そこにあるのは使い古されて風化寸前の記号などではない。色鮮やかな、原初の輝きと律動に満ちた「落書き」だ。何かが語りかけられているというインパクトだけが純粹に感じられる、そんなグラフィティである。

図書館は情報のマッチメーカーであるといったが、あなたの好みの情報を整理して提示してくれるようなおせっかいな仲人なんかでは、もはやない。これからは、図書館は情報のスクランブル交差点の真ん中にあなたを置き去りにし、そこで「遭難」させてしまうだろう。

果たして、あなたは目指す相手に「遭遇」できるだろうか。



## 白と黒

図書課長 多根宏治

本の素晴らしさが語られることは多いですね。

よく言われるのは本の世界に入りこめば「時間を越える」ことができる、「空間を越える」ことができる、「疑似体験」ができる...などです。

「時間を越える」、2012年に暮らしている僕が、幕末の志士たちに熱い思いを寄せたり、22世紀の猫型ロボットのポケットから「未来の機械」(ほんど?)を知る事ができたり。

「空間を越える」、日本の沖縄という小さい島にすんでいる僕が「1Q84」を読めば以前住んでいた池尻大橋(中目黒)や三軒茶屋に戻ることができるし、「ジェノサイド」を読めば、コンゴのジャングルに潜入できる。

「疑似体験」、こどもがいなくても「親」になれたり、大切に思う人がいなくなると「恋愛の駆け引き」を楽しむことができる、いわば人生のシミュレーションを体験できる。

いずれも限りなく安価で手間もかからず準備や資格もいらない。時間(読書スピード)にさえ縛られなければ世界中のあらゆる場所に、いつの時代にも瞬時に移動できる。どんな仕事にも就くことはできるし、いまと違う性別にもなることができる。とまあ、いいことづくしで。

でも、ほかに本の持つ力はあるのです。「ほかに」というより上述の3つをそれぞれあるいは全部楽しんで、たどり着いた地点にはなにがあるのでしょうか? そう、僕の、私の「知らない世界」を教えてください。戦争のような悲惨なことがなぜ起こったのか? なぜ繰り返されたのか? どうしてカルトにはまってしまうひとはいるのか? 無条件に愛するはずの自分の子どもを虐待するのはなぜなのか? 自分が考えないこと、想像できないこと、行わないことを「否定」することは簡単です。いや、「ラク」です。何も考えなくていい、調べなくていい、答えが決まっている考え事ほどストレスのないものはないですからね。停滞気味の社会を変えていくために「一刀両断」を求める世の中の雰囲気があります。(個人的にはこの状況ではある程度、やむを得ないかなと思ったりもしています。)ただ僕は白、君は黒だから「バイバイ」ではなくて、「黒」について知ろうとすることが君への思いやりであり、対立を避け、妥協点を見出すヒントになるはず。そして自分が知らない、あるいは否定していることに近づくのもっとも手軽なものが本です。多様な価値観を認めあうほどに成熟した社会だからこそ、「対立するもの」を知ることが必要で、それを冷静に、持続的に書き記された「本」は価値があるのです。右のひと、左のひと。僕は低所得、君は富裕層。甘党と辛党(すこし違いますね)。互いを理解はできないかもしれませんが、重なりあう事はないかもしれませんが。でも本を通じて近づくと、大切に思うきっかけになると信じてます。

平和を作り出す人たちは幸いである。彼らは神の子と呼ばれるであろう(マタイ5章9節)当学院のHPで神山学長も紹介されている聖書の一節です。私が思うに平和を作り出すとは、自分以外のひとを大切に思うことではないでしょう

か? その「一歩」として、図書館に足をはこび、知らない世界について書かれている「一冊」を手にとってください。きっとその一冊は次の一冊につながり、遠くに見えていた向こう側がなんとなく近くになった気がするはず。遅ればせながら、自己紹介と図書館の現状(未来)を書かせていただきます。私は2011年5月に採用いただきました(卒業生のどなたよりも後輩です)。前職が「大学営業(研究者と図書館)」を専門とする書店に勤務しており、そのため本学にもおつかいがいしてました。前職では入社以来、福岡県→埼玉県→東京都→2009年から沖縄と全国各地を転々していましたが、転勤で沖縄に赴任した多くのナイチャーがそうであるように、いつのまにか「沖縄」への永住をおぼろげに考えていました。嘘のような幸運にも恵まれ、前職のキャリアを生かす図書館配属での転職と相成りました。本を扱うという点では前職も現職も同じなのですが、そこは「営利企業」と「大学」の違いもあり、ストレスと発見のある毎日です。勉強する事も多くて即戦力を期待された割にはいろいろとご迷惑おかけしていますが、前職で培った「仕事のスピード」や取引先との「WIN-WIN」の関係づくり(交渉術)などで図書館にとってプラスの人材になるよう日々精進してまいりますので今後ともよろしくお願ひします。図書館の現状(と今後)については、内閣館長がおおよそお書きになっていますが、蛇足の補足で書かせていただきます。2011年度は受入冊数が前年比の2倍。とはいえ予算は前年同額。主因は「英語多読」、「キャリア開発(就職)」などの低価格な図書に予算を振り分けたためです。大学図書館の存在意義からすると手放しには喜べない状況ですが、当学院や学生の皆さんを取りまく状況を考慮すると、「所蔵しておくことに価値ある図書」よりも「いま使える図書」に集書の舵を切ることを選択しました。実際社会人ですら、懐が寒い理由で図書は購入するよりも公共図書館で借りるという人が増えてます。学生さんの懐具合は言うまでもありません。買わなきゃいけない本も買えないのです。また年々貸し出し冊数も減少傾向にあります。そういった中で図書館の存在意義は来館者を増やし、貸し出し冊数を増やすことで、学生のみなさんに図書館を利用してもらうことだと考えています。そのためにもいま使いたい本(勉強、就職)や今関心や興味のある本(新刊本)を優先的に集書していく予定です。学生のみなさんが「本」を通して、立場の違う相手をすこしでも知って大切に思い平和を作ってくれる、また図書館で勉強することを身につけ、卒業後も遊びにきてくれる、そんな手助けになるような本を揃えて、展示にも気を配っていきます。

私たち館員だけでは気づかない面も多々あるはず。教職員の方、学生のみなさんあるいは学外利用者の方でもかまいません。本学図書館を良く(面白く)するためのアイデアをお持ちでしたら、ぜひおしえてください。





●学内著作活動●

(2011年4月～2012年3月)

青野 和彦

●学会大会研究発表要旨

「バドロ・デ・コルドバ『キリスト教の教え』(1544年)における先住民観―「本性的平等性」の解釈を手がかりに―  
『キリスト教史学』第65集(キリスト教史学会第61回大会研究発表要旨)、2011年7月、キリスト教史学会、249―251頁。

●研究会出席

「近代ヒスパニック世界における共同体の構築:垂直的紐帯と水平的紐帯」  
国立民族学博物館シンポジウム、2011年10月29日、於国立民族学博物館

●学会発表

ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念―2つの『覚書』における「共同体」(comunidad)の目標の検討を通して―  
『キリスト教史学会』第62回大会(2011年9月16日～17日、聖学院大学)

内間 清晴

学術論文(共著論文)

(1)国際誌

“Resistivity and thermopower of  $\text{Ho}(\text{Co}_{1-x}\text{Al}_x)_2$ -effects of pressure and magnetic field”,  
K. Uchima, C. Zukevan, A. Nakamura, N. Arakaki, S. Komesu, M. Takeda, Y. Takaesu, M. Hedo, T. Nakama, K. yagasaki, A. T. Burkov  
Journal of the Physical Society of Japan, 80 SA86 (1-3). (2011)

(2)紀要

“Effect of magnetic field and pressure on electrical resistivity and thermopower of  $\text{Y}_{1-x}\text{R}_x\text{Co}_2$  compounds”  
Y. Takaesu T. Nakama M. Hedo, K. Uchima, K. yagasaki, and A. T. Burkov  
Bulletin of the Faculty of Science University of the Ryukyus No.92 October, (2011)

□頭発表

- (1)国際学会 ①“Transport properties of  $\text{Y}_{1-x}\text{Nd}_x\text{Co}_2$  compounds”, Low Temperature Physics 26<sup>th</sup> (2011.7) Beijing China.  
②“Effect of pressure on thermopower of  $\text{EuNi}_2\text{Ge}_2$ ”, Low Temperature Physics 26<sup>th</sup> (2011.7) Beijing China.  
③“Pressure Effect on Transport Properties of  $\text{NdCo}_2$ ”,  
“International Conference on Strongly Correlated Electron Systems (SCCESS2011)” (2011.9) Cambridge UK.
- (2)国内学会・研究会 高圧討論会(2011.11)沖縄キリスト教学院  
琉球物性研究会(2011.11)琉球大学  
日本物理学会(2011.3)関西学院大学

大山 伸子

- 原著論文:「沖縄県の中学校・高校における宮良長包音楽の実践状況と方向性(4)  
―中学校・高校音楽担当教諭へのアンケート調査に基づいて―」沖縄県立芸術大学紀要第20号、2012年3月発行
- 作品解題:「宮良長包生誕記念音楽祭プレコンサート宮良長包作品の解題(演目20曲)」2012.3.19

照屋 信治

- 1.「発掘された近代沖縄教育史料②」『沖縄タイムス』2012年2月16日
- 2.「『沖縄方言論争』と『沖縄教育』誌上の「標準語」教育論―「混用」という可能性―」日本教育史研究会『日本教育史研究』第30号、38-64頁、2011年8月
- 3.「[書評]後田多敦著『琉球救国運動 抗日の思想と行動』歴史科学協議会『歴史評論』第736号8月号、2011年8月、92-96頁
- 4.「[書評]『沖縄県史 各論編第五巻 近代』『沖縄タイムス』2011年6月25日

本浜 秀彦

- 1.「太郎にご用心!―「太平洋」という座標の中の沖縄・日本』『すばる』(集英社)4月号
- 2.『琉球新報』時評2011(文芸)
  - ①「東北と沖縄の相似性と対極性」4月25日付文化面
  - ②「川柳と小説の批判精神」7月25日付文化面
  - ③「拝啓 村上春樹様」10月31日付文化面
  - ④「沖縄の「冬物語」」2012年1月30日付文化面
- 3.『役割語研究の展開』(共著)(くろしお出版)2011年6月
- 4.「文学は戦争を思想化できるか」『琉球新報』6月29日付文化面
- 5.「色彩の叛逆」(『春秋』)
  - ①「落ち着きのない「色彩」と岡本太郎」2011年7月号
  - ②「岡本太郎の「赤」というフィクション」8・9月号
  - ③「岡本太郎、色彩を穿つ」10月号
  - ④「欲情するアラキー、あるいは肌色のエロス」11月号
  - ⑤「アラキーが求めた迷宮の色彩」12月号
  - ⑥「沖縄の色彩構築をめぐる―アラキーと東松照明」2012年1月号
  - ⑦「松井冬子、悲しみの黒髪」2・3月号
- 6.「解説」岩波現代文庫/大城立裕『カクテル・パーティー』(岩波書店)2011年9月
- 7.「“集団自殺”するクジラと「鯨絵」の想像力」『早稲田文学』④(早稲田文学会)9月



## 2011年度主な図書館関係行事

### ◎特別講演会「内部被曝の問題について」

図書館主催(沖縄キリスト教平和研究所・沖縄キリスト教学院東日本大震災支援実施本部共催)による特別講演会「内部被曝の問題について」が開催され、学内外より56名の参加がありました。

講師：矢ヶ崎 克馬氏  
(琉球大学名誉教授・沖縄キリスト教短期大学客員教授)  
演題：「内部被曝の問題について」  
日時：2011年5月14日(土) 14:00～16:00  
場所：本学 SHALOM 会館 1-1 教室



○講演会に際し、被曝問題関連資料及び写真パネルを図書館ロビーに展示しました。

展示内容：「広島・長崎被曝写真パネル」  
本学図書館所蔵の「被曝問題関連図書」  
期間：2011年5月12日(木)～31日(火)  
場所：沖縄キリスト教学院図書館 1階ロビー



### ◎「2011こんな本読んだ」推薦図書展

図書館では、学内の学生・教職員が愛読書を紹介する「こんな本読んだ」を編集発行。冊子で紹介した図書を展示した推薦図書展を開催しました。

展示内容：「2011こんな本読んだ」推薦図書展  
学内の学生・教職員が推薦した図書を紹介  
展示期間：2012年2月1日(水)～2月14日(火)  
場所：沖縄キリスト教学院図書館 1階ロビー



## — 2012年度新規購入雑誌 & データベース —

### ◇ 2012年度新規購入雑誌

- ・『Number』(隔週刊) 文藝春秋社
- ・『日経ウーマン』(月刊) 日経 BP 社
- ・『日経ビジネスアソシエ』(月刊) 日経 BP 社
- ・『日経エコロジー』(月刊) 日経 BP 社
- ・『日経ビジネス』(週刊) 日経 BP 社
- ・『日経トレンド』(月刊) 日経 BP 社
- ・『日経ヘルス』(月刊) 日経 BP 社
- ・『日経サイエンス』(月刊) 日経 BP 社

### ◇ 2011年度『論集』・『紀要』発行

- ・2011年度『沖縄キリスト教学院論集』第8号—大城宜武教授退任記念号—
- ・2011年度『沖縄キリスト教短期大学紀要』第40号



### ◇ 2012年度購入中止・廃刊雑誌

- ・『月刊双康ダイジェスト』(月刊) 光映出版 廃刊
- ・『大学と学生』(月刊) 第一法規出版 廃刊
- ・『Church and State』(月刊)  
Protestants and Other Americans United for  
Separation of Church and State 中止

